

第 6 章

特別支援教育研修会

平成27年度 北海道今金高等養護学校 特別支援教育研修会 開催要項

研究会主題

キャリア発達を促す実践とプランニング

～協同学習、キャリアプランニング～

1 目 的

「協同学習」や、地域の「キャリアプラン制作」に関わる講演やワークショップを通して、地域のセンター校として、地域の学校に還元できる情報を提供し、参加者全員のスキルアップを図る。

2 日 時

平成27年7月30日（木） 10：00～14：50

3 会 場

北海道今金高等養護学校

〒049-4304 瀬棚郡今金町字今金454-1

TEL：(0137) 82-3121 FAX：(0137) 82-3092

E-mail：imayou@hokkaido-c.ed.jp

4 講 師

北海道教育大学函館校	准教授（本校研究アドバイザー）	北村 博幸 氏
札幌市立三里塚小学校	教諭	大野 睦仁 氏

5 日 程

9：45	受付開始
10：00	開会・学校長挨拶・講師紹介
10：10	本校の研究紹介（10分）
10：20	講演 大野睦仁先生「協同学習の実際」
12：00	昼食（学校紹介ビデオ上映）
13：00	キャリアプランニング・ワークショップ
14：30	助言 北村博幸先生
14：45	謝辞
14：50	閉会

6 内 容

(1) 本校の研究紹介

本校で行われている研究内容についてご説明し、研修会開催の目的をお伝えいたします。

(2) 講演

協同学習を用いた授業づくりに取り組んでおられる大野睦仁先生。先生の実践を通して、協同学習を用いた学級の様子、子どもの変化、協同学習を行うことによる悩み等を、お話していただきます。

(3) キャリアプランニング・ワークショップ

地域の方にとって実際のキャリアプラン作成のヒントになるような取り組みとして、ワークショップを実施いたします。児童生徒の架空事例を用意し、それぞれの事例の児童生徒がつけるべき力を、キャリア教育の「4領域（情報活用能力、将来設計能力、人間関係形成能力、意志決定能力）」を用いてまとめ、表にします。参加者の校種別にグループに分けて、グループごとに取り組むことになります。最後に、北村博幸先生にご助言をいただきます。

7 参加申込

- ・ 7月22日（水）までに、FAX または E-mail にてお申し込みください（別紙）。
- ・ 研究会に関するお問い合わせは、研修部 野呂・村瀬までお願いいたします。

【本校周辺略図】 お手数ですが、昼食は各自で御持参・御用意いただくようお願いいたします。



【講師紹介】

北村博幸氏：筑波大学大学院修士課程 教育研究科 障害児教育専攻 修士課程修了後、北海道雨竜高等養護学校教諭、筑波大学附属大塚養護学校教諭、名寄市立大学助教授、准教授を経て、現在、北海道教育大学函館校准教授。著書に「子どもと家族を支える特別支援教育へのナビゲーション」「特別支援教育の授業づくり」「社会とかかわる力」を育てる! 6つの支援エッセンス（明治図書）、論文多数。

大野睦仁氏：北海道札幌市出身、北海道教育大学卒業。札幌市立澄川西小学校、札幌市立山の手養護学校、札幌市立豊成養護学校、札幌市立栄町小学校、札幌市立東光小学校、札幌市立厚別通小学校を経て、現在、札幌市立三里塚小学校教諭。著書や記事を執筆された著作に、「やる気と集中力を持続させる国語・算数・社会・理科の授業ミニネタ&コツ101」（学事出版）、「すぐ使える授業ハンドブック」（たんぽぽ出版）、「イラスト版からだに障害のある人へのサポート」（合同出版）、「クラスに安心感がうまれるペア・グループ学習」（学事出版）、「笑顔と対話があふれる校内研修」（学事出版）、「THE 保護者対応～小学校編～」「THE 教室環境」（明治図書）などがある。

1 講演「協同学習の実際」

大野睦仁氏について

三理塚小学校に勤務。在校生400名、4月に移動し現在5年生を受け持つ。分掌は研究部の研究主任。6年生に関してはこれまで10回受け持った経験がある。札幌市立豊成養護学校勤務の経験を通して、命の授業を行ってきた。

本研究会では実際に小学校で行っている実践についてお話いただいた。具体的には、以下の4点である。

I. 協同学習と協同的な学習の違いについて

II. 協同学習の体験

III. 協同学習をやってよかったこと、大変なことについて

(1) 協同学習と協同的な学習の違いについて

協同学習とは、例えば、個人の活動として詩を作り、その後グループとなって、意見交換を行うような学習のことである。協同学習をすることによって、顔を隠してしまう子や手を上げることのできない子でも、グループが必ず順番に話すように教師が促すことによって話せるようになったり、仲間のアドバイスを受けて、自分の考えをより深めて発想したり、お互いその事柄について理解できる学習である。協同学習はグループワークやペア交流とはどう違うのか、端的に述べると「違う」という答えになる。しかし、ただグループで話し合ってみよう、交流してみようでは、協同学習とは言えない。必ず1人1回は話すこと等、教師がフレームをつけることによって協同学習の要素を持った学習となる。例えば、国語のテキストを読んだ感想を交流することは、感想を言い合っているだけで交流学習ではない。すなわち、一般的なペア交流やグループ交流は協同学習とはいえない。しかし、アイスブレイクとしては十分に使うことが可能である。大切なのは教師が学習の意図や効果を狙ったフレームを設けることである。以下は協同学習の大家、スペンサー・ケーガン氏が示した4つの指標である。

- ① お互いがお互いに WIN×WIN な関係がある。
- ② 個人の責任がある。
- ③ 参加の平等性。(グループで決めなさいでは、力の強い人のいいなりになってしまう。しっかり集まって話し合いをさせる)
- ④ 活動の同時性。(みんなが同じように参加できる)

スペンサー・ケーガン氏は上記4つの指標に当てはまるもの全て協同学習であると述べているが、協同学習には様々なスタイル、潮流がある。大野氏はこれらの要素の他に、協同学習ならではの意図や効果、すなわち構成的なフレームが必要であると考える。

(2) 協同学習の体験

○ペアで交流する場合

大野氏が考えたフレーム

①時間配分を決める（自由にやるのではなく、お互いに1分は話す）

※1分間話すことが難しければ、相手側に質問をして引き出す。

②相手の考えにフィードバックする。ただ聞くのではなく、返す。

③相手の思いや考えを聞いて、自分の思いや考えを返話する。

協同学習は一見自由学習に思えるが、自由交流にしないこと、生徒の実態を把握してより高い学習効果を狙ったフレームをつくるのが大切である。しかし、そのためには、子どもたちの状態をより細かく見極める必要があり、一斉授業よりも難しい側面がある。また、自由交流には良さもあり、無理やり話したくない子に話をさせるよりも自由交流にした方が良い場合もあるし、時間を決めないでゆっくり話しを聞いた方がよい時もある。

なぜ協同学習の考えが必要なのか。

① 学習観…自分の学びが仲間の役に立つ、仲間の学びが役に立つ、自分のためにも仲間のためにも真剣に学ぶことが社会のため、世界のために繋がることを学ぶ。

② アクティブ・ラーニング…子ども達が能動的に学ぶことによって、後で学んだ情報を思い出しやすい、あるいは異なる文脈でもその情報を使いこなしやすいという理由から用いられる教授法であるが、協同学習を行うことでこの要素を取り入れることができる。

③ 協同学習 PISA「協同型問題解決能力」…今日では情報はいつでも手に入るため、むしろ判断する力や問題解決力が必要となる。

以上3つの観点から、教育現場において協同学習の考えが今後必要になってくると言える。協同学習では、目の前にしている子ども達にどういった力をつけたいかを考えることが大切である。例えば、コミュニケーション力は実際に言葉を発して、やりとりすることによって身に着くと考えると、一般的な授業ではコミュニケーション能力を授業でつけていくことは難しい。しかし、協同学習が身に着くと色々な子ども達がいる中で、教室の中でどう関わっていくのか、どのような学習を進めるのか、協同学習的な考え方をを用いる事で、コミュニケーション力を学ばせていくことが可能となる。

○ワークショップ 恋するフォーチュンクッキー ○○バージョンをつくろう。

① どんなバージョンにするか、3分間で紹介したい場所を個人でワークシートに記入する。

② グループの中で順番を決めて、1番の人は2番の人に、2番の人は3番の人へとワークシートを渡す。ワークシートをもらった人、その人の意見へフィードバックを書く。(選んだ場所について、アピール点、感想)

③ 同じ方法でワークシートを回して全員の意見を聞き、改めて自分の考えを振り返る。

今回のワークショップでは、ワークシートに必ず全員から意見をもらうことをフレームとし

た。このフレームを設けたことで、ワークシートが自分の所へ戻ってきた時のわくわく感や、PR するための VTR 製作を一人よがりなものにしないため、活動を通して人の意見を聞くことを学習できた。また、グループ全員が他者のワークシートへ同時に意見を記入していくため、生徒は時間を余すことなく活動に集中することができた。

今回のような授業は決して特別なのではなく、当たり前のように対話をする場面を取り入れなければ意味がない。また、多面的に意見を検討する等、目的を持って交流することが重要である。また、協同学習を行う際、子ども達にはモデルが必要である。グループで集まった際の学習の進め方について、教師が見本を示しても良いし、一つのグループにモデルをさせて、他のグループにどこが良かったのか、悪かったのか、こんなやり方もある等の意見を出し合っても良い。そして、協同学習のグループは異質なものと出会わせることが大切である。誰とでもいいから交流をなささいでは、必ず友達の方に行ってしまう。異質なものと出会わせるようなグループ配置を考えたり、名簿を渡して、まだ交流していない人と交流するように声をかけたりしても良い。仲の良い友達じゃなくても発見があることを学ばせることが大切である。さらに、お互いの視線を合わせるように座らせる等、交流する場に配慮することも必要である。

(3) 協同学習をやってよかったこと、大変なことについて

一斉授業には、確かに集団授業での教えやすさがあるが、学びやすさを重視すると、一斉授業には限界がある。

大野氏の場合は、到達度の違いや特性の違いがある子一人一人に対してどのようにねらいを持って学ばせるかを考えた時に、協同学習の観点に着目するようになった。

○大野氏が現在行っている実践。

大野氏が現在行っている算数の授業では、到達度の違いや特性に違いがある子（具体的には、授業中座っていられない、立ち歩きが見られるような子）や、集団で学ぶことが辛い、友達と会話することが辛い子に対して、どのような学びを提供することが望ましいのかを考え、以下のような授業づくりを行っている。

- ① 6時間のうち、1時間ごとに区切って単元の内容を説明するのではなく、内容に応じて説明を区切りながら行う。次に、内容に対して課題を持たせる。例えば、 $365 \div 2$ の計算を速く解けるようにする、正確に解けるようにする等である。
- ② ノートに足跡を残し、自分達で到達度をチェックする。達成できていた場合はネームカードを次の内容へと移して取り組み、学びを振り返る。
- ③ 分からない問題がある子ども同士がグループになって集まって教え合う。相手に教える事で自分がきちんと理解できるかを学ぶことができ、プラスになることを伝えた上でこの活動を行う。また、立ち歩きたい子は立ち歩くことを許している。これは、グループを周ることによって落ち着き、他の生徒の活動の様子を見ることが学習意欲にも繋がるからである。

- ④ ホワイトボードに掲示板のコーナーを設け、教えてほしいことを書く。それを見た子はその子に対して分からないことを教えてあげる。

一見自由に見えるが、実は遊んでいる生徒は一人もいない。フレームを決めることによって、フレームの中で自分の活動範囲を考えて行動でき、子ども達はフレームに入り込む楽しさを覚える。協同学習の要素を入れることによって、個別に生徒と関わる時間も増えた。

協同学習の考えは、多様な学びのスタイルに答えることができる。また、支援が必要な生徒への時間をたくさん作ることができたり、生徒が能動的に学んだりすることができる。保護者からは『先生がやっている授業は材料だけを与えてレシピがない』、『大人が教えたって分からないのに子どもが教えて本当に分かるのか』といった意見もあるが、この意見に対し、大野氏は子どもだからこそ通じ合い分かりあえることもあるのではないかと考え、レシピがない状態から何かを作り出すチャンスを奪ってはいけなさと考えている。しかし、問題点があるのも事実であり、例えばネームカードが次のステップに進んでいかない場合、その生徒の課題が見える半面、目に見えて他の生徒に学習状況が遅れていることも分かってしまう。また、一斉授業の方が分かりやすい生徒もいるため、協同学習には光の部分と影の部分があると感じる。

まとめとなるが、協同学習、協同的な学習のよさを生かすためには、生徒理解を深め、その生徒の学びに対応できるチャンネルを多く持つこと、協同学習を行った結果を受けて、シビアに判断して子ども達の学びに合わないと思ったらやめること、世の中の情報を取り入れて、自分の実践を見直して問い返すことが必要である。

2 キャリアプランニングワークショップの記録

(1) ワークショップの目的

檜山管内唯一の特別支援学校として、地域に還元できる内容で学びの場を設定できないか考えた。檜山管内では、管内で独自に進める取り組みを「ひやま Model」といい示している。その中で特別支援教育については、「個別の教育支援計画の活用の一層の促進」が挙げられていた。個別の教育支援計画作成とキャリア教育の概念をつなげる一つのヒントとして、キャリア教育の「4 領域 8 能力」のうち、「4 領域（情報活用能力、意思決定能力、将来設計能力、人間関係形成能力）にクローズアップして、架空の生徒事例をもとに、生徒の課題と目標を整理する取り組みを行った。

(2) ワークショップの説明

15分	・ 説明
15分	・ 自己紹介、役割確認、準備
5分	・ 事例確認
10分	・ 事例児童生徒の課題。
5分	・ グループ内で発表。
20分	・ 4領域分類、指導目標。
15分	・ グループ発表

どのような取り組みをおこなうのか、どこまでやればゴールなのかが参観者にわかりやすいように、スライドを体育館のステージに表示しながら説明を行った。

ワークショップの流れとともに、「ワークショップの経緯と目的」「キャリア教育とは何か」「ワークショップのゴール」「4 領域とは何か」について説明した。

特に、「4 領域」については、このワークショップを行う上で基本的な概念になる。そのため、4 領域のそれぞれの力の定義、力のイメージ、具体的に関連することについて、時間をかけて説明した。また、どの行動がどの能力に当てはまるのか問題を通して、理解を深めるようにした。

(3) 自己紹介

ワークショップはグループに分けて行った。初めて出会った方々がチームになって話し合いを行う。活動をやりやすくするために、話す内容を3つ選んでから自己紹介を行う取り組みを行った。

事例の確認

- ・事例1 小学6年生 男子児童 Aくん 知的障害
特別支援学級に在籍 将来の夢は「レストラン」で働くこと。
- ・事例2 中学3年生 女子生徒 Bさん 診断名なし
通常学級に在籍 将来の夢は「書店員」
- ・事例3 高等養護学校産業科2年生 男子生徒 Cくん
知的障害+自閉症 将来の夢は「清掃業」

(4) 事例について

3つの架空事例を用意し、事例について、課題は何かを読み取ってもらった。次に、その課題が4 領域のどれに当てはまるか分類した。最後に、分類した課題に対して、どのような指導目標が考えられるかを検討した。

架空事例については、左の通りである。

また架空事例の詳細については資料に提示した。

(5) 話し合いの実際



どのグループも真剣に話し合いが行われていた。時間を区切っていたが、時間が足りなかった。



発表に関しては、発表するグループのところへ全体で移動しながら聞くようにした。ただ聞くだけという形になってしまったので、聞いたあとどう自分のグループや自分のことに還元できるかを考える必要があった。

(6) 北村博幸先生より

北村先生からご助言をいただいた。内容を以下に掲載する。

運営側の時間配分の見通しの甘さにより、北村先生のご助言の時間が所定の時間より少なくなったこととお詫びいたします。

みなさんお疲れさまでした。先生方の発表を聞いて、コメントに困ってしまっているところです。このワークショップの目的が架空の事例の課題を明確にして、その課題から指導目標、もしくは目標に応じた指導内容を考えてしまっているので、ワークショップの目的については達成してしまっているのです、これ以上コメントはしないでおこうと思います。ただ、一人の事例を複数の目で見ているので、かなり課題を明確にすること、指導内容をより具体的にするのに、やっぱりこのチームの力というのは有効なのだということを改めて思いました。それで、違う視点で、コメントをしようと思います。

大事ななのは、例えばキャリア教育の大事なポイントというのは、子どもにキャリア発達を促すというのが一番のポイントなんですが、我々教員がキャリア教育をする上で、実はメリットがあって、それは、キャリア教育の視点で考えると、授業改善につながるというところは最初から言われているところです。授業改善というポイントでひとつ、お話をしたいと思います。

キャリア教育を進める上で、今日立てた指導内容を授業を展開する、どう手立てを作るかというところの一番のポイントは、児童生徒がもっている強い部分がいかにか手立てに活用できるかが大事だという風に言われています。子どもで、強い弱いと考えてしまうと、例えば極端にいうと、2つ考えられます。1つは、まだできていないところを焦点化してできるように指導していく、繰り返し指導していくというやり方もある、もっている強い部分、長所を焦点を当てて、そこを苦手な部分を補うように指導していくという考え方の2つがあると思います。通常我々はバランスよくやっていると思うのですよね、年齢によって違うかもしれません。

先ほど、みなさんがディスカッションする中で、挨拶に関しても、事例が小学生のグループでは、「挨拶ができることは大切だね。」「挨拶ができるような手立てを考えましょう。」と、小学生のグループでは言っていました。とても大事だと思います。一方で、事例が高校生のグループでは、「さすがにこの年齢になって、あと1年間で誰にでもあいさつができるというのは、それは厳しいよね。」「違う方法で考えよう。」「違う内容、もっと優先順位を考えましょう。」と、まさにそのとおりなんだろうなあと思います。

話は変わりますが、全盲の子に、全く視力が無い子に、通常の一般の教科書を渡して、「100回読んでごらん。100回読めたら読めるようになるよ。」とは絶対にしないですよ。全盲のお子さんに、一般の教科書を渡してがんばってがんばって読んでごらんという指導は絶対にしないと思うのですよね。ただ、残念ながら、知的障害を含む発達障害の場合は、ちょっとがんばってやらせると、できそうな気持ちになってしまうのです。でも我々はもしかしたら、全盲の子に教科書を読んでもということと同じようなことを求めている可能性がある、その辺の見極めがとても大事になってくるのだらうなと思います。

何が言いたいかというと、キャリア教育を進める上で、課題を明確にする、課題から目標設定して、指導内容を考える。そこまでは先生方はプロなので、いとも簡単にできると思います。大事なのは、どういう風に授業を作り上げていくのかということの方が、はるかに難しいし、大変だと思います。この点は、もしかしたら午前中の講演にあった「協同学習」がひとつの方法論かもしれません。いくつもあろうと思うのですが、強調したいと思うのは、がんばってトレーニングすればいいという問題ではないということだと思います。分からないときは何でもかんでも自分でできるようになるのではなくて、分からないときには、誰かにヘルプを出す力も大事だと、まさにそういうことが大事なのかなと思います。他にもメモがあるのですが、この辺で終わりたいと思います。

※次ページより、キャリアプランニング・ワークショップの資料を添付する。

資料1 「キャリア発達にかかわる諸能力(例)」(4領域8能力)より4領域の解説資料。」

資料2 「キャリアプランニング・ワークショップ 事例集。」

4 領域について

4領域

情報活用能力

意思決定能力

4領域

将来設計能力

人間関係形成
能力

情報活用能力



学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。

今必要な情報を選んだり集めて、自分の考えや判断に使ったり、役立てていけるようにしていく領域。

「キャリアプランニング・マトリックス(試案)」(国立特別支援教育総合研究所、2010)
「みんなのライフキャリア教育」(渡邊昭宏、明治図書、2013)

情報活用能力



- ・ルール、行動の意味。
- ・働くための知識、喜び、役割の理解。
- ・知っている知識を活用して行動する。

「キャリアプランニング・マトリックス(試案)」(国立特別支援教育総合研究所、2010)
「みんなのライフキャリア教育」(渡邊昭宏、明治図書、2013)

将来設計能力



夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。

先を見通して、行動に必要な準備をまえてできるようにしていく領域。

「キャリアプランニング・マトリックス(試案)」(国立特別支援教育総合研究所、2010)
「みんなのライフキャリア教育」(渡邊昭宏、明治図書、2013)

将来設計能力



- ・活動の見通しを持つ。
- ・順序立てて行動を計画する。
- ・習慣の形成。

「キャリアプランニング・マトリックス(試案)」(国立特別支援教育総合研究所、2010)
「みんなのライフキャリア教育」(渡邊昭宏、明治図書、2013)

人間関係形成能力



他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。

社会(集団)のなかにおける自分の立場や役割を学び、適応力をつけていく領域。

「キャリアプランニング・マトリックス(試案)」(国立特別支援教育総合研究所、2010)
「みんなのライフキャリア教育」(渡邊昭宏、明治図書、2013)

人間関係形成能力



- ・人と関わる。(他人や自己の理解)
- ・集団で活動する。協力して活動する。
- ・自分の意思を伝える。(言葉、文字、表情など)
- ・挨拶、清潔、身だしなみ、場に応じた言葉。

「キャリアプランニング・マトリックス(試案)」(国立特別支援教育総合研究所、2010)
「みんなのライフキャリア教育」(渡邊昭宏、明治図書、2013)

意思決定能力



自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。

他人の言いなりや他人任せから脱却できるようにしていく領域。

「キャリアプランニング・マトリックス(試案)」(国立特別支援教育総合研究所、2010)
「みんなのライフキャリア教育」(渡邊昭宏、明治図書、2013)

意思決定能力



- ・自分で目標や行動を決める。
- ・自分の気持ちをコントロールする。
- ・自分のことを前向きにとらえる。

「キャリアプランニング・マトリックス(試案)」(国立特別支援教育総合研究所、2010)
「みんなのライフキャリア教育」(渡邊昭宏、明治図書、2013)

キャリアプランニング ワークショップ 事例1

小学6年生 男子児童 Aくん 特別支援学級に在籍。

将来の夢は、「レストラン」で働くことです。

- ・食えることや調理をすることが好きで、自分でご飯を炊いたり、味噌汁を作ることはできます。

- ・細かい仕事も好きで、手先も器用で、オムライスを作った時は、ケチャップでジバニャンの絵を書くほどです。

- ・料理を作ることは好きでも、食べた後の片付けが苦手です。皿洗いの手順を覚えることが苦手で、洗剤を使わないときもあります。洗剤を使って洗う意味を理解していないようです。

- ・洗い終わった皿を片付けるときも、皿を片付ける位置が覚えられず、片付けの見通しを持ってないため、困ったまま立ち止まっているときがあります。

- ・調理の前や、調理の後、手洗いをするのを忘れます。手を洗うように言うと、指先をちょっとだけぬらして、すぐに手をふきます。教師が、Aくんの隣で、石けんをつけて手をこすることを見せると、その真似をして、手を洗うことはできます。しかし、何度まねをさせても、一人のときは、指先をぬらすだけです。手を洗うことの意味がわかっていないようです。

- ・Aくんは、一つのことにじっくり取り組むことが好きです。じっくりと集中していたいこともあり、休憩時間は一人でいることが多いです。

- ・休憩時間では、ずっと料理の本を見て過ごしています。そのため、あまり、同じ学級の児童や、交流学級の児童とは積極的に関わろうとしはしません。一人でいることを好みます。いろいろな人と関わってほしいとは思っていますが…。

- ・本人は、レストランという仕事は接客もあることを知っているため、人と関わっていかないといけないと言うのですが、失敗も怖いし、関わるのが面倒で、なかなか自分から関わろうとすることができません。

- ・失敗は嫌いです。失敗をすると、落ち込んでしまいます。3日間くらい、暗い顔で過ごすことがあります。

・Aくんは、他人と会話をすることも得意ではありません。最初はあいさつさえ緊張してできないこともありました。「おはよう」「さようなら」のあいさつはできるようになりましたが、それも担任や家族に対してであり、他の大人や児童には、しないことが多いです。

・Aくんは、相手の話はよく聞いています。先生の「国語の次は、図工ね。図工は6年1組でやります」という連絡など、人の話を理解して行動に移すことができます。しかし、返事がなく、話を聞くとすぐに行動に移してしまいます。

・Aくんは、わからないことがあっても、質問をすることがなかなかできません。質問をしようとしても言葉が出てこないのです。さらに、身構えてしまい、体もこわばり、汗も出てきます。緊張するとなかなか元に戻ることができません。緊張をほぐす方法がわからないようです。

・困ったときは自分で考えてなんとか解決しようとします。それでもわからないときは、黙って座っているか、辛いときにはトイレに逃げて行ってしまふときもあります。緊張することや言葉がうまく出てこないことに課題がありそうです。

・自分ができることは行いますが、基本的に自分で選択したり、自分で決めることが苦手です。例えば、今日どんな服を着ていくかということでも、母親が用意されたものを着てきます。料理も、何を作るか言われたら、その料理を作りますが、自由に作ることは苦手です。

・宿題を忘れてきたり、朝寝坊をすることが多く、遅刻をしがちです。登校までの見通しや計画を考えることが苦手です。

Aくんが「レストランで働く」という夢に向かっていくには、どのような力が必要になってくるでしょう？

キャリアプランニング ワークショップ 事例2

中学3年生 女子生徒 Bさん 通常学級に在籍しています。

将来の夢は、「本に関わる仕事をする。函館蔦屋書店の書店員」です。

・Bさんは本が好きで、昼休みになるといつも図書室にいて、太宰治や三島由紀夫、ドストエフスキーなどの小説を読んでいます。あまりに夢中になりすぎて、昼休みのあとの授業は、いつも遅れて教室に来ます。

・遅刻はいけないことだと考え、早めに教室に戻ったこともありましたが、その後の授業で本の続きを読み始めてしまい、結局先生に叱られてしまいました。授業中に本を読むことはいけないということはわかっていますが、読みたいという気持ちを抑えられないそうです。

・勉強は得意で、いつもテストの成績は上位に入ります。例えば、数学は自分で教科書を読んで理解してしまいます。授業は退屈なようです。

・Bさんは、休憩時間はずっと本を読んでいます。そのため、話をする友だちはあまりいません。また、あまり自分から話しかけようとしません。あいさつや返事はしますが、正直めんどくさいと思っているようです。先日も、「なぜ、あいさつや返事などをしないとイケないのか」と担任に話をしていました。あいさつや返事の意味がわからないようです。

・そんなBさんも、中3という段階ですので、進路を考えないといけません。担任との進路相談では、将来、函館蔦屋書店で仕事をしたいと言っていました。

・函館蔦屋書店は店が広く、本がたくさんあり、あまり人と関わらなくても、本と向き合えばいいと思っているようです。「自分の好きな仕事をたんたんとこなせばいい」と言っています。

・本は好きでも、なかなか人と関わろうとしないところについて、担任は聞いてみました。Bさんは、本と向き合うことができたならそれでいい、と言っていました。人と話をする時、困ることが多いからです。具体的には「人と話をするとき、相手の話を聞くことが難しく、聞き逃してしまうこと」「相手に合わせて話をする」「自分が話をしすぎる」など、会話をする事自体に苦手意識をもっているとのことでした。

・一人で本を読んでいる時が一番幸せだそうです。家に帰っても、スマホで書評が書かれたブログを眺めながら、本を読んでいるそうです。

・近くの書店に行って、自分が欲しいと思っていた本が売り切れだったりすると、そのことを受け入れられず、「私の本なのに！」とイライラし、欲しいわけではないのに、別の本を

衝動的に買って帰ることがあります。Bさんが書店員だったら、自分のお気に入りの本を、果たして、お客さんに販売することができるのだろうか、という不安を担任は感じています。

- ・Bさんは、まわりの人にどういうふうに見られているか、あまり気にしていないところがあります。ジャージからシャツが出ていたり、耳の中に指を入れたり、ゴミ箱にゴミを投げ入れて、入らなかったらそのまま放っておいたりなど、無頓着なところが見られます。なぜ、人前で耳の中に指を入れたらいけないのかなどが、わからないようです。

- ・そうじなど、まわりを手伝うこともなく、さっさと自分のことだけを行う傾向があります。協力して活動するということが苦手です。そのため、ペアで活動をする事自体も、めんどくさいようです。他人の様子にはあまり興味がないようです。

- ・だから、まわりもBさんをあまりいいようには見ていません。

Bさんが「函館蔦屋書店の書店員」という夢に向かっていくには、どのような力が必要になってくるでしょう？

キャリアプランニング ワークショップ 事例 3

高等養護学校産業科 2 年生 男子生徒 C くん 知的障害＋自閉症

将来の夢は、「清掃業」です。

- ・小学校 3 年生から特別支援学級に在籍。中学校も特別支援学級に在籍していました。
 - ・体力はあり、速くはないですが、同じペースで走り続けることができます。マラソンは好きです。
 - ・会話は苦手です。学校では、担任以外の人と話をすることができません。他の人の話には、うなずいたり、首を振ったりして、自分の意思を伝えることはできますが、言葉で伝えようとはしません。
 - ・学校では粘土を使って、陶器を作る作業を行っています。誰よりも丁寧に、コーヒーカップやお皿を作ります。製品の細かいキズにも気付き、しっかりとヤスリをかけて、作品を仕上げるすることができます。
 - ・電車が大好きです。活動の途中でも電車が来ると、見入ってしまいます。学校のそばには、線路があり、30 分に 1 本程度ですが、電車が走ってきます。作業に集中していても、電車が窓から見えると、動きが止まって、電車に見入ってしまいます。そして、また、作業に取りかかります。
 - ・仕事で失敗することがあると、なかなか立ち直るのに時間がかかります。先日も、手が滑って、作った製品を落として割ってしまいました。「自分のせいで、自分のせいで…まわりに迷惑をかけた」と言い続け、切り替えに時間がかかります。自己評価の低さがうかがえます。
- ・朝起きることが苦手で、特に土日は、朝 10 時位に起床してきます。平日は朝ごはんを抜くこともあるそうです。
- ・先日、学校の外に出て作業学習を行う、「現場実習」が行われました。朝早くの出勤をしなければならず、朝ごはんを食べたり、着替え、洗顔、歯磨き、ひげそり、整髪など、出勤までに行うことが多すぎて、ひげをそらずに出勤をしたり、歯磨きをすることを忘れて出勤したりする日がありました。また、遅刻にはなりませんでしたが、寝坊したため、ぎりぎりの出勤になった日もありました。起床から出勤までの行動計画を立てることや、時間を意識することが苦手なようです。
- ・ひげそりなど、朝に行うことを忘れていても、あまり気にしていないようです。ひげがのび放題のときもありました。ひげをそるなど、身だしなみをしっかりとすることの意味がわからないようです。

・現場実習では、高齢者介護施設の清掃の仕事を行いました。床に落ちている細かいゴミもきちんと見つけて、きれいにしていきました。モップや掃除機の使い方などは教わるとすぐに覚えて取り組むことができました。

・ゴミの分別がわからず、困っていました。わからないことがあっても質問ができず、立ちつくしていました。

・清掃の作業では、1つの場所を終えたら、次にどこを清掃をしたらいいのかわからず立ち止まっていたり、仕事の中に電車が見えるとじっと手が止まってしまったりなどの課題が見られました。

・掃除中に通行人の方が来ても、まったくよけるそぶりもなく、あいさつもすることもなく、淡々と仕事を行っていました。

・時間内に決められた場所の掃除が終わらなかった時は、「自分が悪い自分が悪い」と言い続け、結局、暗い表情のままその日の仕事を終えていました。次の日の朝にはさっぱりした顔になっていましたが、切り替えに時間がかかります。

・実習先の職場の方には、「一日の仕事の流れを自分で理解してほしいこと」「わからないことがあったら聞いてほしいこと」「電車に気を取られないこと」「通行人などまわりの状況を意識すること」「通行人にはあいさつをすること」「失敗は誰でもすることがある。だから、顔に出さないこと」など、指摘を受けました。

・細かいところに気づき、与えられた場所は手順にそってキレイにするなど、清掃の仕事をする力は高いので、そこは評価されましたが、たくさん出てきた課題に、Cくんは、清掃業で働きたい気持ちが弱まり、「働きたくない」と担任に訴えていました。働く意味について、考える必要があるかもしれません。

Cくんが「清掃業を行う」という夢に向かっていくには、どのような力が必要になってくるでしょう？

（梅永雄二（2009）「夢をかなえる！特別支援学校の進路指導」の事例を改変しました。